



～聞いて、触って、感じて、そしてよく見て～

生後5か月頃になると、子どもは自分から手を伸ばして物を触ろうとする行動が現れますが、見えにくさのある子どもでは、それがやや遅れて現れる傾向があります。そのため、自分から触ってみようとか、動いてみようといった気持ちを育てるために、いくつかの工夫が必要です。

- ① 子どもが好きな音や音楽を見つけ、積極的に聞かせてあげる
- ② 好きな手触りや光ってより見えやすいおもちゃで遊ぶ

①については、歌絵本などを使って一緒に歌を楽しむなどが挙げられます。保護者と一緒に楽しむことで、その心地よさを十分に経験するとよいですね。少しずつ自分でもボタンを押してみようという気持ちになったり、実際に自分で押して大好きな音楽を経験できたりすると、自分でもやってみようとか、それを保護者と一緒にしようという気持ちの芽生えが期待できます。また、歌に合わせて子どもの手を取って歌詞に合わせて手を打って歌ったり、ときにはダイナミックに一緒に転がったりするなどの動きを合わせたりするのもいいですね。

②については、子どもの見る力に合わせて、部屋の明るさを調節し、まぶしすぎないように配慮しながら光るおもちゃを見せたり、光だけでなく音や動きのあるおもちゃなど、複数の感覚で楽しめる工夫をしたりするといいですね。

①や②をいろいろと組み合わせた遊びを通して、子どもの笑顔が増えたり、もっとやると自分から求めてきたりと、積極的に身の回りの物や身近な人と積極的に関わろうとする気持ちを育てていきます。



また、好きな遊びを広げるためには、もともと好きな遊びに新しいおもちゃや遊びをつなぐことで、無理なく広げていく工夫になります。例えば、好きな子守唄を歌ってあげながら、初めて遊ぶ犬のぬいぐるみを触ったり抱かせてみたりなどもそうです。

子どもの中には、動くおもちゃが苦手な子もいます。見えにくさがあると、その動きが予測しにくいことがあるからでしょう。そのようなときは、安心できる保護者の膝の上などで、保護者の安心する声や説明を聞きながら動いているおもちゃの音を聞いたり、音が移動しているのを感じたりすることから始めて、怖がることなく楽しめる体験を広げ、積み重ねていけるといいですね。

見えにくさがあると、身の回りの状況を把握することも難しい場合があるので、保護者の積極的なかわりが求められます。お散歩中だったら「お花が咲いてるね。」と見える景色を言葉にして教えてあげたり、「大きな車が通ったね。」と音や動きなどの様子を描写したりするなど、普段なにげなく通り過ぎてしまう情報も、子どもと共有する経験をたくさんしてみてください。昨今はさまざまな魅力的なおもちゃや動画チャンネルなどが溢れています。そうしたおもちゃや動画を単に与えることよりも、直接に顔を合わせて一緒に遊んであげるといった積極的なかわりが、子どものさまざまな力を発達させることが分かっています。今回ご紹介した工夫をぜひ参考にさせていただき、子どもの笑顔を増やしてみてください。



<参考文献>

猪平 眞理 編著「視覚に障害のある乳幼児の育ちを支える」 慶応義塾大学出版会 2018
無藤 隆・高橋 恵子・田島 信元 編 「発達心理学入門Ⅰ」 東京大学出版会 1990